阿南市の民家

民家班（日本建築学会四国支部徳島支所）

高田　哲生[1*]　喜多　順三[2]　谷中　俊裕[3]　田村　栄二[4]　椿地　浩之[5]　中山　茂[6]
林　茂樹[7]　福田　頼人[5]

要旨：旧阿南市（那賀川町，羽ノ浦町を除く）の茅葺き民家を対象に悉皆的調査を行い，確認した59軒について分布図や一覧表に整理し，立地や間取り，規模，構法などを比較検討した。そのうち，協力を得られた６軒について平面採取や小屋組等の詳細調査を行った。その結果，立地条件による屋敷構えの違いや建物規模や間取り，勝手の傾向を明らかにすることができた。また，架構については上屋のみの構造の民家が多いことがわかった。

キーワード：茅葺き民家，民家の間取り，屋敷構え，勝手の位置，下屋の形式

１．はじめに

阿南市は，徳島県東部の中央海岸線に位置し，四国最東端にある。北は小松島市と勝浦町に接し，西は那賀町，南は美波町に接する。また東は紀伊水道，南は太平洋を臨み，西は四国山系の東端に連なる山地，北には小松島から続く平地がある。地形は山地と渓谷盆地，平地の３つに区分できる。

阿南市は平成18年３月20日に那賀郡羽ノ浦町と那賀川町を編入合併しているが，今回の調査は合併以前の阿南市域（「旧阿南市」という）に限った。

旧阿南市の民家を対象とした建築史学的調査として，昭和51年（1976）に徳島県教育委員会が行った徳島県民家緊急調査がある。調査報告の「阿波の民家」には４軒の民家が紹介されているが，旧阿南市の民家の概要を把握するには更なる調査が必要とされていた。

２．調査の目的と方法

１）調査の目的

伝統的な形式を備える茅葺き民家を対象に，その規模や間取（まどり）・構法（こうほう）・外観等について，時代とともにどのような変化を遂げてきたかを確認し，また県内他地域の茅葺き民家と比較検討することにより，旧阿南市の茅葺き民家の特徴を明らかにすることを調査の目的とした。

なお，当初は茅葺き民家であったものの小屋組を改造し，切妻や入母屋屋根に小屋下（こやさ）げしたものは，外観での判断が困難なため，調査対象から除外した。

２）調査の方法

平成25年度に１次調査として，旧阿南市内の茅葺き民家に対して悉皆的調査を行った。調査項目は以下の通りである。

・敷地：立地（平坦地・傾斜地），方位

1　高田建築設計　2　空間計画研究所　3　阿南高専　4　徳島県建築士会　5　くすの木建築研究所　6　アトリエU
7　林建築事務所
＊　770-8022　徳島市大松町上の口62－１　takata@muf.biglobe.ne.jp　088－669－4226

・平面形式：間取り（聞き取り及び実測による），勝手の位置，玄関構え
・規模：間口寸法×奥行寸法
・屋根：仕上げ，形状，下屋（げや）の形式
・外壁：形式（真壁・大壁），仕上げ材
・建築時期（聞き取りによる）

平成26年度には１次調査物件のなかから，更に平面採取や小屋組（こやぐみ）の解明，棟札による建築時期の確認など詳細な調査を行った。

３．調査民家の概要

悉皆調査により59軒の茅葺き民家を確認した。**表１**に調査結果を，**図１**に調査民家の分布を示す。

表１　調査民家一覧表

No.	所在地	屋根		下屋	外形寸法		勝手	玄関	間取	建築時期	主屋方位	敷地形状	利用形態	屋敷構え	付属屋
		材料	形状		間口	奥行									
1	下大野町	トタン	寄棟	四方	6.0	4.5	右	無	四間取	－	南	平坦地	居住	平野型	
2	下大野町	トタン	寄棟	四方	6.5	－	右	無	四間取	明治32(1899)	南	平坦地	居住	平野型	離れ, 門
3	長生町	トタン	寄棟	四方	5.5	4.0	右	無	四間取	－	東	東傾斜	空屋	平野型	
4	長生町	トタン	寄棟	四方	6.0	－	右	無	－	－	南	平坦地	居住	平野型	納屋
5	長生町	トタン	寄棟	四方	6.0	－	右	無	四間取	大正初頃	東	平坦地	居住	平野型	
6	長生町	トタン	寄棟	四方	6.5	－	右	無	－	－	南	平坦地	居住	平野型	納屋, 蔵
7	長生町	トタン	寄棟	四方	4.5	－	右	有	－	－	南	平坦地	空屋	平野型	納屋, 門
8	水井町	トタン	寄棟	四方	5.3	3.5	左	無	－	－	南	東傾斜	空屋	山村型	離れ
9	水井町	トタン	寄棟	四方	5.5	－	左	無	－	－	南東	南東傾斜	空屋	山村型	納屋
10	水井町	トタン	寄棟	四方	6.0	3.5	右	無	四間取	－	東	東傾斜	居住	山村型	納屋
11	吉井町	トタン	寄棟	四方	－	－	左	有	－	－	南	北傾斜	居住	平野型	離れ
12	吉井町	トタン	寄棟	四方	6.3	4.0	右	無	四間取	大正末頃	南	東傾斜	居住	平野型	ミカン倉庫
13	楠根町	トタン	寄棟	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
14	大田井町	トタン	寄棟	四方	5.5	3.8	右	無	四間取	明治32(1899)棟札	南東	南傾斜	居住	山村型	納屋
15	大田井町	トタン	寄棟	四方	6.0	3.5	左	無	四間取	明治30頃	南東	南傾斜	居住	山村型	納屋, 離れ
16	大田井町	トタン	寄棟	四方	6.5	4.0	左	無	四間取	明治11(1878)棟札	南東	南東傾斜	居住	山村型	
17	大井町	トタン	寄棟	四方	5.5	3.0	右	無	－	－	南	南傾斜	居住	山村型	－
18	細野町	トタン	寄棟	四方	5.0	3.5	右	無	四間取	明治期	南西	西傾斜	居住	平野型	納屋
19	山口町	トタン	寄棟	四方	6.5	2.5	右	無	元五間取	－	南	南西傾斜	空屋	山村型	長屋門(便所)
20	山口町	トタン	寄棟	四方	6.5	3.5	右	無	四間取	－	南東	南東傾斜	空屋	山村型	納屋
21	山口町	トタン	寄棟	四方	5.0	3.5	右	無	四間取	－	南	南東傾斜	空屋	山村型	－
22	山口町	銅板	寄棟	四方	5.5	4.0	右	無	四間取	－	南	平坦地	居住	平野型	蔵
23	山口町	トタン	寄棟	四方	－	－	右	無	－	明治初頃	南	平坦地	居住	平野型	－
24	山口町	トタン	寄棟	四方	6.5	4.5	右	無	食違四間取	文久2年(1864)棟札	南	平坦地	居住	山村型	－
25	山口町	トタン	寄棟	四方	－	－	右	無	－	－	東	平坦地	居住	平野型	
26	山口町	トタン	寄棟	一方	3.0	2.0	－	無	－	－	西	南東傾斜	納屋	山村型	－
27	桑野町	トタン	寄棟	四方	6.5	－	右	無	四間取	明治中頃	南	平坦地	居住	平野型	納屋, 門
28	新野町	トタン	寄棟	四方	6.0	4.0	右	有	－	－	南東	平坦地	居住	山村型	厩, 納屋, 蔵
29	新野町	トタン	寄棟	四方	5.0	4.5	左	無	四間取	江戸中期？	東	－	居住	山村型	納屋
30	新野町	トタン	寄棟	四方	4.0	4.0	－	無	－	－	南	平坦地	空家	平野型	厩, 納屋
31	新野町	トタン	寄棟	四方	5.0	4.5	左	無	－	－	南	平坦地	居住	平野型	納屋
32	新野町	トタン	寄棟	四方	6.0	4.5	左	有	五間取	幕末期	南	平坦地	居住	平野型	厩, 納屋
33	新野町	トタン	寄棟	四方	7.0	5.5	左	有	－	－	南	平坦地	空屋	平野型	納屋, 離れ
34	新野町	銅板	寄棟	四方	8.5	6.0	左	有	八間取	明治33(1900)棟札	南	平坦地	居住	平野型	納屋, 門長屋
35	新野町	トタン	寄棟	二方	5.0	4.0	右	無	四間取	－	南	平坦地	空屋	平野型	－
36	新野町	トタン	寄棟	四方	－	－	右	無	－	－	南	平坦地	空屋	平野型	－
37	新野町	トタン	寄棟	四方	5.5	4.5	右	無	－	－	南	平坦地	居住	平野型	厩, 納屋
38	新野町	トタン	寄棟	三方	5.0	－	右	無	－	－	南	平坦地	空屋	平野型	納屋
39	福井町	トタン	寄棟	四方	6.0	4.5	中央	－	－	－	南	南傾斜	空屋	平野型	納屋

No.	所在地	屋根		下屋	外形寸法		勝手	玄関	間取	建築時期	主屋方位	敷地形状	利用形態	屋敷構え	付属屋
		材料	形状		間口	奥行									
40	福井町	トタン	寄棟	三方	5.8	3.0	左	無	－	－	南東	平坦地	居住	山村型	離れ
41	福井町	トタン	寄棟	四方	6.0	－	左	無	四間取	大正初頃	南西	平坦地	居住	平野型	納屋
42	福井町	トタン	寄棟	－	－	－	－	－	－	－	－	－	空屋	－	－
43	福井町	トタン	寄棟	三方	6.0	3.0	右	無	－		南東	南傾斜	空屋	山村型	離れ
44	福井町	ｾﾒﾝﾄ瓦	寄棟	四方	7.3	－	右	有	－	明治44(1911)	南東	東傾斜	居住	平野型	長屋門, 納屋, 蔵
45	福井町	トタン	寄棟	四方	－	－	右	無	六間取	慶応3(1867)	南	平坦地	空屋	平野型	
46	福井町	トタン	寄棟	四方	4.5	3.5	左	無	－	－	東	東傾斜	空屋	平野型	厩, 離れ
47	福井町	トタン	寄棟	四方	6.0	4.0	右	無	四間取	－	南東	南西傾斜	空屋	平野型	納屋, 蔵, 離れ, 便所
48	椿町	トタン	寄棟	四方	6.0	4.0	右	無	六間取	－	南	平坦地	空屋	平野型	離れ
49	椿町	トタン	寄棟	四方	6.0	－	右	無	－	－	東	平坦地	居住	平野型	納屋, 離れ
50	椿町	トタン	寄棟	四方	6.0	4.5	右	無	－	－	南	平坦地	居住	平野型	納屋
51	椿町	トタン	寄棟	四方	7.0	4.5	右	有	六間取	明治40頃	南	平坦地	居住	平野型	納屋(築40年程)
52	椿町	トタン	寄棟	四方	6.5	4.0	右	無	四間取	昭和22,　23頃	南	平坦地	居住	平野型	納屋(昭和9年)
53	椿町	トタン	寄棟	四方	5.5	3.5	右	無	四間取	－	南	平坦地	空屋	平野型	納屋(タバコの乾燥小屋)
54	椿町	トタン	寄棟	四方	6.0	4.0	右	無	四間取		北	平坦地	居住	平野型	納屋
55	椿町	トタン	寄棟	三方	6.0	3.0	右	無	横二間取	－	北西	平坦地	空屋	山村型	納屋, 便所風呂
56	椿町	トタン	寄棟	四方	6.0	4.0	右	無	四間取	－	南	平坦地	居住	平野型	納屋(昭和20年頃)
57	椿町	トタン	寄棟	四方	6.0	3.8	右	無	四間取	大正5(1916)札書き	南	平坦地	居住	平野型	納屋
58	椿町	トタン	寄棟	四方	6.5	4.0	右	有	六間取？	－	南西	南西傾斜	空屋	平野型	納屋, 離れ
59	椿町	トタン	寄棟	－	－	－	右	－	－	－	南西	平坦地	空屋	平野型	－

※網掛け部は詳細調査民家を示す

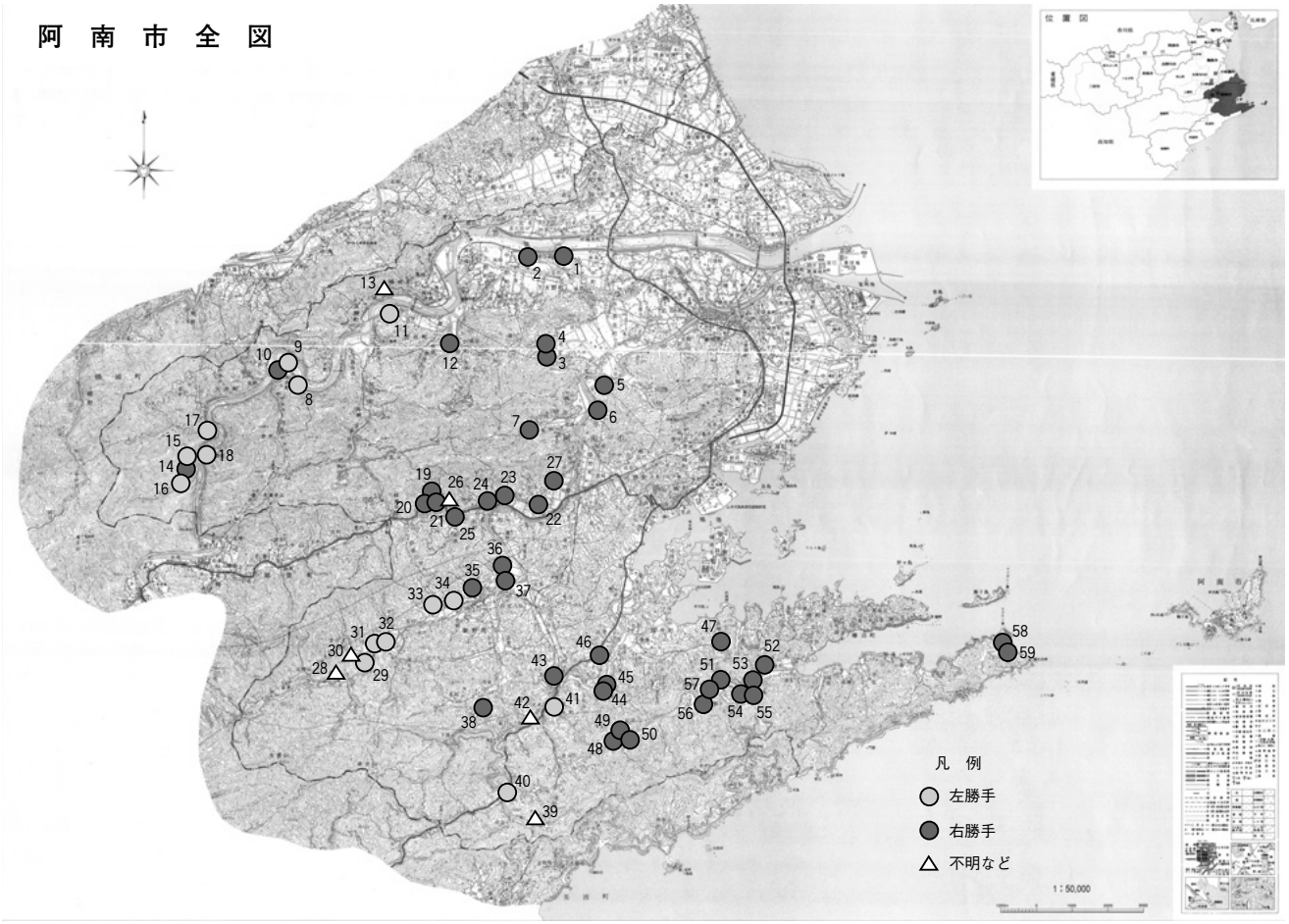

図１　調査民家分布図

1）立地・分布

平成25年８月に旧阿南市において悉皆的外観調査を行い，60軒（うち納屋１軒を含む）の茅葺き民家を確認することができた。平成12年（2000）国勢調査データで比較すると，阿南市は徳島県下のなかでは最も茅葺き民家の割合（茅葺き民家率＝茅葺き民家件数／世帯数）が低い地域である（**図２**）。

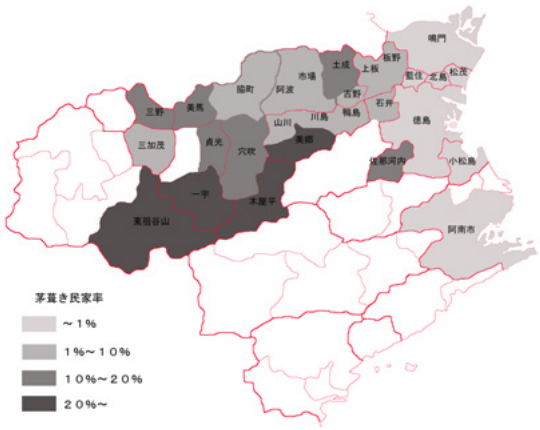

図２　茅葺き民家率

旧阿南市における集落の立地は，平野部と山間部，山麓部，沿岸部に分類することができる。今回調査した茅葺き民家の多くが山間部及び山麓に立地しており，平野部や沿岸部には少なかった（**図３**）。新野や桑野，吉井などの山麓では集落が発達しており，茅葺き民家も比較的残っている。かつては平野部や沿岸部にも茅葺き民家が存在していたが，都市化が進む中で急速に失われていったと考えられる。

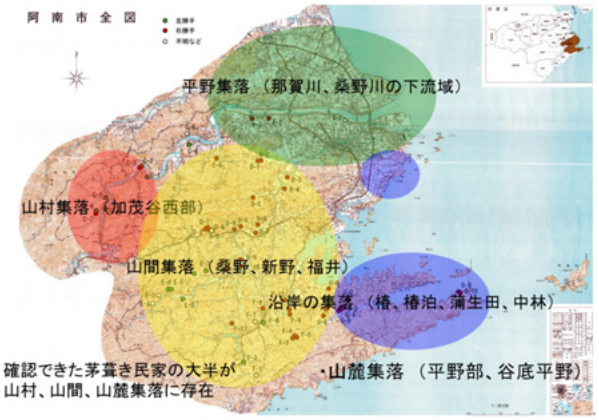

図３　集落の立地と茅葺き民家の分布

2）屋敷構え・間取り

一般的に山間部では厳しい地形条件のなかで斜面を切り盛りし，谷側に石垣を積んで屋敷地を造成する。そのため等高線に沿った細長い屋敷地に主屋・納屋・離れなどが直線上に並ぶ屋敷構え（**図４**）となるが，急峻な山間部の加茂谷西部地区にこのような山の民家がみられる。分布図では山の民家が多く山村型の屋敷構えが多そうに見えるが，山麓では平野型の屋敷構えを持つものもあり，全体では平野型の屋敷構え（**図５**）が71%を占めている。間取りは，山村型と山麓，平野とも四間取（よまどり）の割合が高く，詳細調査で確認した横二間取（よこふたまどり）の民家以外に，県内山間部の代表的な間取りとされる二間取（ふたまどり）や三間取（みまどり）系間取りのほか，鍵座敷（かぎざしき）型間取りは確認できなかった（**図６**）。

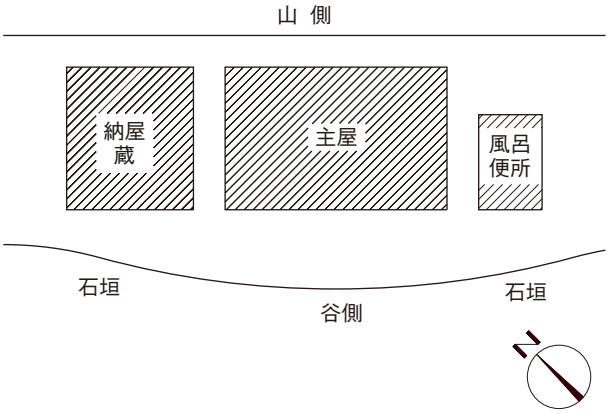

図４　山村型屋敷構え

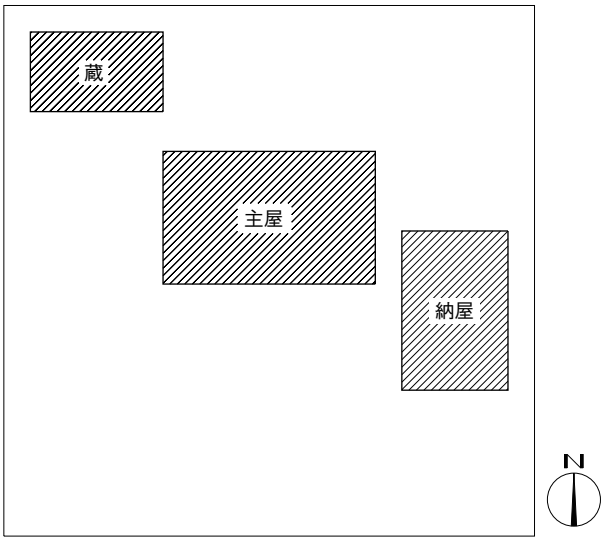

図５　平野型屋敷構え

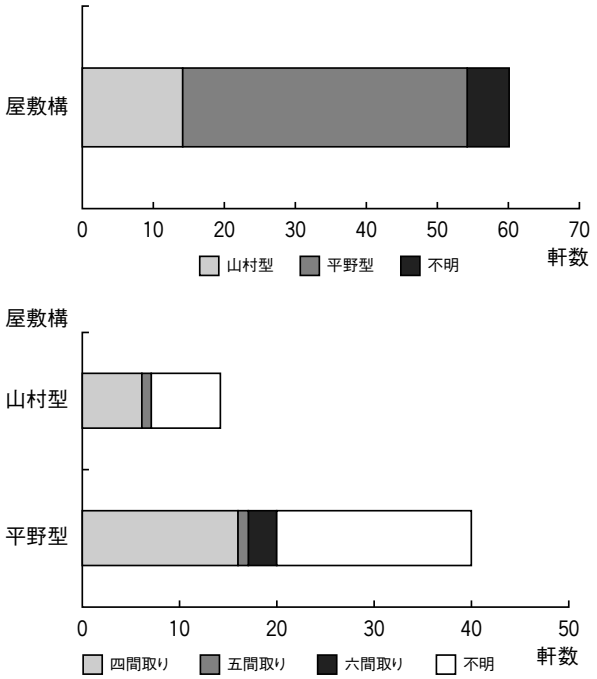

図６　屋敷構え・間取り

３）屋根の形態

屋根の形態は，山村型，平野型共に上屋が寄せ棟茅葺きでその四方に下屋を廻す「四方下（しほうげ）」（図７）の割合が高く，「オブタ」（図８）と呼ぶ下屋が四方に廻らないものの割合は低い（図９）。当初の葺き材では山間部で山茅が使われており，太田井町での聞き取りでは村の茅場があったという。本調査において，屋根は全てトタンで巻かれており，茅のままのものはみられなかった。

図７　四方下

図８　オブタ

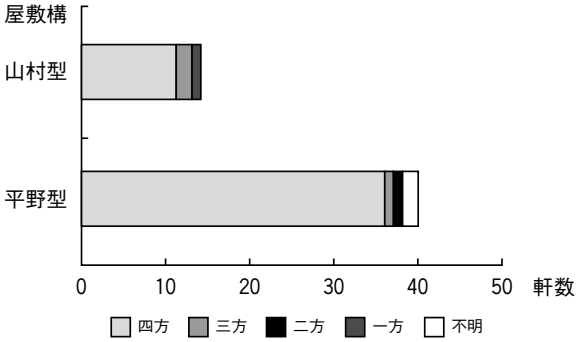

図９　屋根の形態

４）間口（建物規模）

建物規模を示す間口をみると六間の割合が最も高く，次いで五間で，その２つの占める割合は67%を占める。平野部では六間が，山間部では五間が多く，平野部の民家の規模が大きい傾向がみられる（図10）。

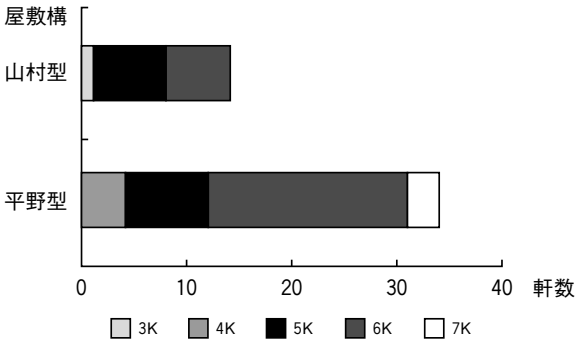

図10　間口

５）主屋の方位

主屋の出入口の方位でみると，山村型・平野型にかかわらず南向きが最も多く，全体の約80%を占める。山麓部と山間部では，南斜面が多く傾斜が緩やかなためと考えられる（図11）。

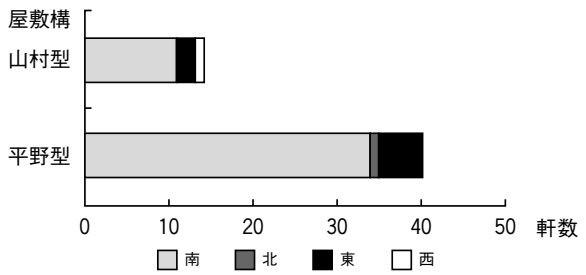

図11　主屋の方位

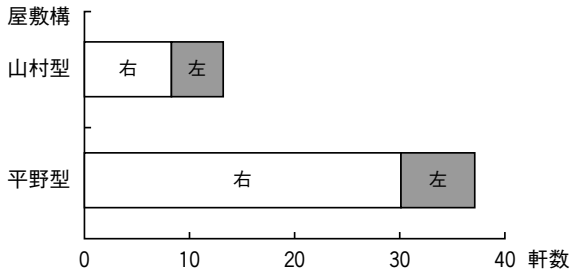

図14　入口の勝手

6）入口の勝手

入口の勝手については他地域のこれまでの調査結果から，県西部は左勝手が多く，東部や沿岸部地域においては右勝手が多い傾向を示しているが，阿南市でも右勝手が約75%と多くなっている（図12･13）。主屋を強い風雨から守るため納屋などの付属屋を東に配置するため，その動線の関係で右勝手が多くなっているのではないかと推察できる。平野部では右勝手の割合が高く，山間部ではその割合は低くなっている（図14）。また確認できた限りでは，明治以降の新築や改造によるとみられる玄関構えの民家（図15）が９軒あった。

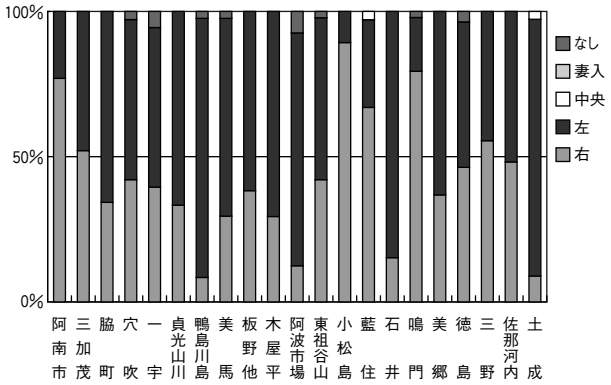

図12　入口の勝手（他地域との比較）

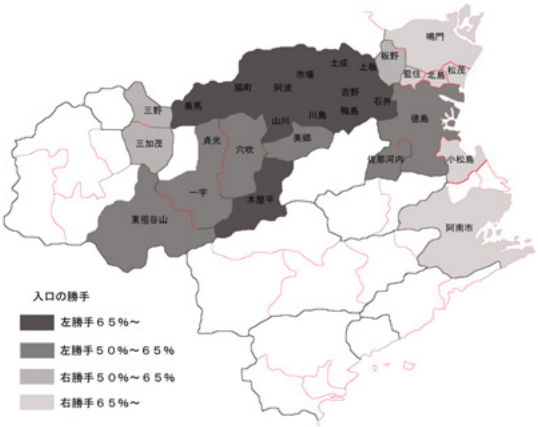

図13　入口勝手の割合（他地域との比較）

図15　玄関構え

7）建築年代

建築年代は棟札（図16）で確認できたものと聞き取り調査できたもの合わせて19軒で，内訳は昭和１軒，大正時代４軒，明治時代10軒，江戸時代４軒という結果であった。

図16　No.14民家の棟札

8）利用状況

居住の割合は低くはないが，空き屋の割合が約40%と高い。山間部では半数近くが空屋となっており（図17），廃屋となっていて近づくことができないものもある。また，住宅以外の用途では１軒の納屋を確認した。

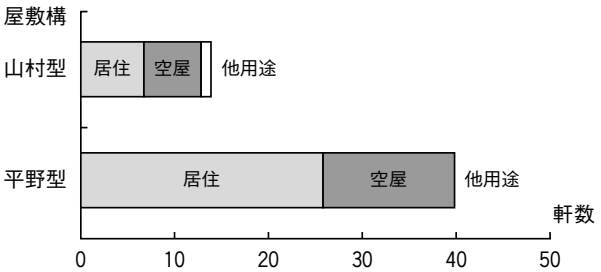

図17　利用状況

4．詳細調査民家

1）No.15（山間部／山村型）

那賀川の西岸，主要地方道阿南鷲敷日和佐線より少し上った東斜面に立地し，那賀川に流入する小さな沢の北側で，南に向く屋敷である。家の創建は500年前といわれ，かつて牛や馬を飼って米・炭・茶・みかんなどを作っていた。谷側に高く石垣を積み，主屋の東に２階建て瓦葺きの離れザシキ，西に２階建て瓦葺きの納屋があり，主屋と付属屋が等高線上に並ぶ典型的な「山の民家」の屋敷構えである。

図18　主屋外観

主屋（図18）は，寄棟茅葺きトタン巻き四方下で，間口６間，奥行3.5間，上屋梁3.5間の左勝手四間取。東の四部屋は変更が少ないが，離れザシキに面する西側はカマヤに座が張られるなど改造されている（図19）。小屋裏へ上がれず，棟札を確認することはできなかったが，明治32年（1899）築の隣家より少し古いとの聞き取りから明治30年（1897）頃の建築と思われる。柱は杉材で那賀奥の倒木が流れてきたのを蓄えて使ったという。部屋には長押（なげし）が付けられ，天井は根太天井で梁や軒桁を顕し，その上には土を置いている。下屋は当初杉皮葺きであったが新野から買ってきた瓦で葺き替えられたという。持ち出し梁によりその下屋桁を受けている（図20）。また，昭和30年頃に茅葺き屋根にトタンを巻いたという。

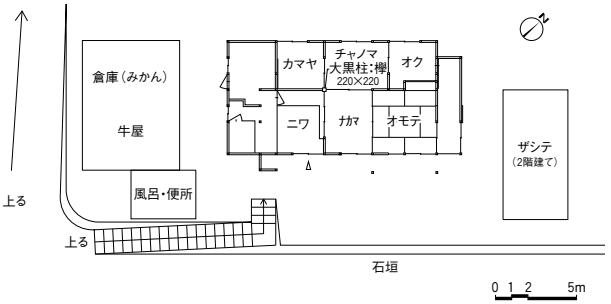

図19　配置平面図

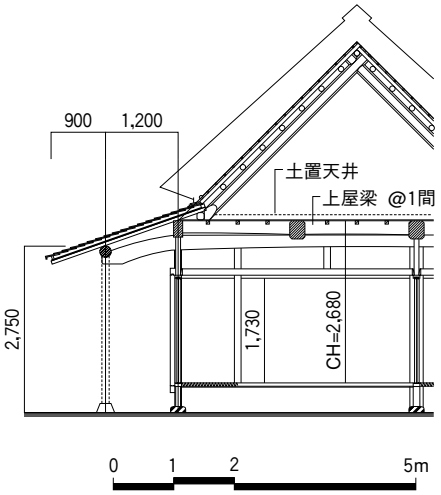

図20　主屋矩（かなばかり）計図

2）No.16（山間部／山村型）

当家は太田井町の最も奥の谷合，南斜面に立地している。屋敷地は等高線に沿って高く立派な石垣を積み造成している。主屋の西に納屋，牛屋，便所などがほぼ一直線に並ぶ山村型の屋敷構えである（図21）。主屋（図22）の建築年は棟札により明治11年（1878）と確認できた（図23）。間口6.5間，奥行４間，上屋梁2.75間で，間取りは左勝手整形四間取（一部聞き取りによる）である。昭和40年頃にトタンを巻き，昭和50年頃に曳家をして谷側へ移動させたという。小屋組は丸太で組まれた叉首（さす）が１間毎に配置された構造で（図24・25），下屋は当初からのものだという。チャノマには，かつて囲炉裏があった。古くは筏（いかだ）に乗っていたが，その後炭焼きやみかんを生産していた。

図21　屋敷遠景

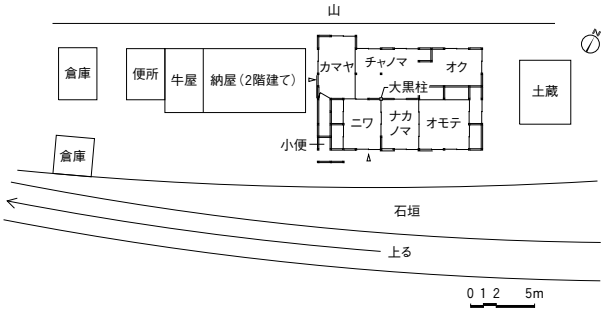

図22　配置平面図

図23　棟札

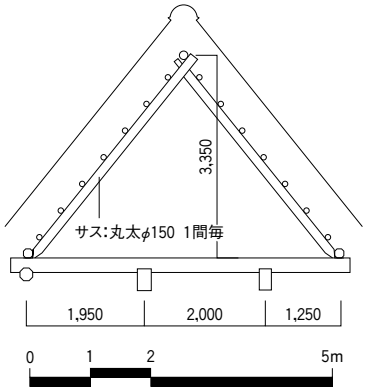

図24　小屋組断面図

図25　小屋組

3）No.24（山麓部／山村型）

当家は山口町大久保の山麓部に位置する。南東向きの屋敷地は，背後に山を抱えており，周囲を等高線上に石垣で造成し，北東から木造２階建て瓦葺きの納屋，ブロック造の風呂場と主屋が一列に並ぶ，山村型の屋敷構えを有する。

主屋は，間口6.5間，奥行4.5間，上屋梁3.5間，寄棟の茅葺き屋根をトタンで覆い，本瓦葺きの四方下（**図26**）。家人によると，屋根材には近くの川原で採取した葭（よし）を用いていたという。最後に葺き替えを行ったのが昭和50年頃で，10年後にトタンで巻いた。

図26　主屋外観

間取りは上手に細長い部屋を有する変形五間取であるが（**図27**），桁や梁の痕跡から，上手（かみて）の半間と裏側の１間は後の増築によるもので，当初は桁行６間，梁間４間の喰違四間取であったものと考えられる。また，ニワとカマヤの間に物置があったことも明らかになった。

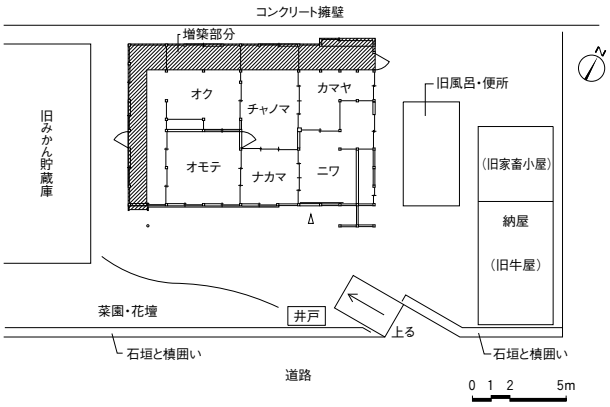

図27　配置平面図

下屋の正面は中間部の柱を省略するため，両脇の柱とナカマの両横から持ち出した梁により桁を支持する形式が採用されている。

架構は上屋（じょうや）のみの構造で，軸組に大黒柱を用いているが，大黒柱の周囲に差鴨居は見られない。小屋組は叉首構造で材料は全て丸太材が使用され，棟木を支える棟束（むなづか）や叉首を繋ぐ貫は用いられていない（**図28**）。

図28　小屋組

小屋裏には棟札が３枚残されており，そのうち２枚はそれぞれ安政６年（1859），文久２年（1862）と記されていたが１枚は判読できなかった。最も新しいと思われる文久２年の建築と推測される（**図29**）。

図29　棟札

４）No.34（山麓部／平野型）

当家は，桑野川中流域北岸の山麓に位置する。主屋を屋敷地中央北側に配置し，その南側のニワをはさんで桁行9.5間，梁間2.5間の大きな長屋門を配する。西側には新宅，土蔵，納屋と立ち並び，東側には庭園をもつ，平野型の屋敷構えである（**図30**）。屋敷境には石積みと槙囲いが巡らされ長屋門と相まって，この屋敷構えを特徴づけている（**図31**）。

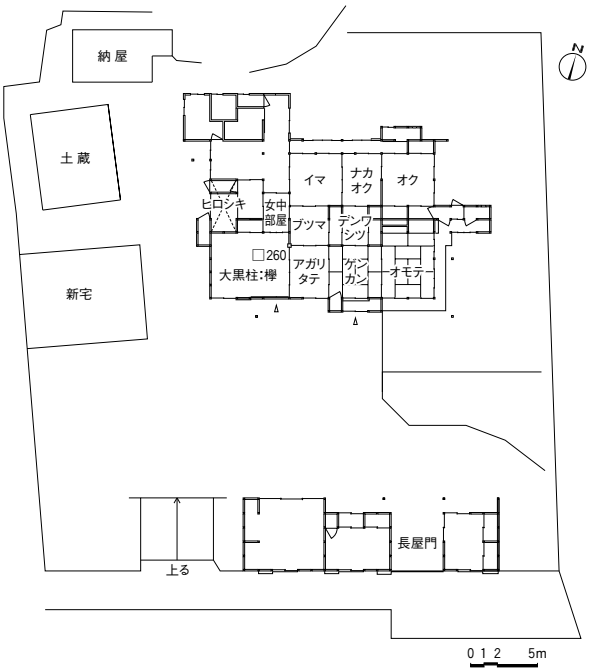

図30　配置平面図

図31　屋敷遠景

図32　主屋外観

主屋（図32）の建築年は棟札により明治33年（図33）。規模は，桁行8.5間，梁間６間，上屋梁3.5間。左勝手であるが，ゲンカンの南に客用の出入口を持つ玄関構えである。間取りは八間取と大きく，ゲンカン，アガリタテ，オモテ，ブツマ，イマ，ナカオク，オクとあり中央にデンワシツがある。ニワの奥には女中部屋，ヒロシキがある。座敷の造りも贅を尽くしたものとなっている（図34）。

小屋組は丸太組の叉首構造としているが，叉首の開き止めとして水平に屋貫を入れている。また，後に２階を増築するために上屋梁から１尺ほど上げた位置に桁をまわして叉首を受けている（図35・36）。茅葺き屋根は，昭和60年頃に銅板で巻いたという。当時，集落24軒で共有の茅場があり，家族総出で刈りに出かけた。茅をもらえた年は小屋裏に積み上げて保管し，傷んだ屋根の補修に使ったという。また，四周には本瓦葺の下屋を有する。

図33　棟札

図34　座敷

図35　桁で叉首を受ける

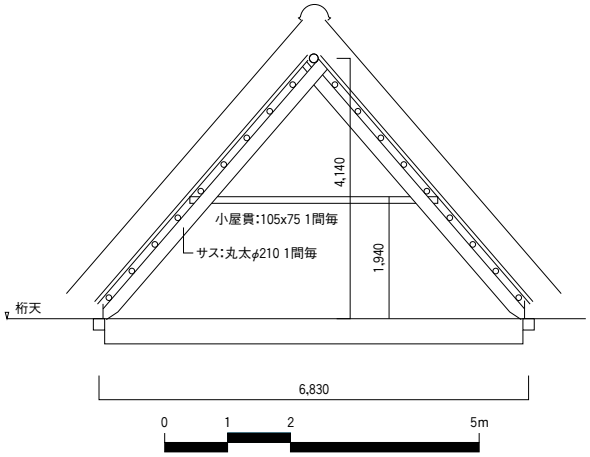

図36　小屋組断面

５）No.55（山麓部／山村型）

県道蒲生田福井線・椿川から南へ少し離れた山際に建つ山麓部の山村民家である。南に山を背負い前面に野面石を積んだ屋敷地は北向きに開き，主屋とその西に風呂・便所棟が並ぶ屋敷構えである。現在は空き家となっている。

主屋は間口６間，奥行３間の寄棟茅葺きトタン巻きで，下屋は桟瓦葺きで南と東西の三方につくが繋がってはいない（図37）。主屋の北と東部分は増築されているが，元の間取りは桁行4.5間・梁間2.5間の右勝手横二間取と推察される（図38）。

図37　主屋外観

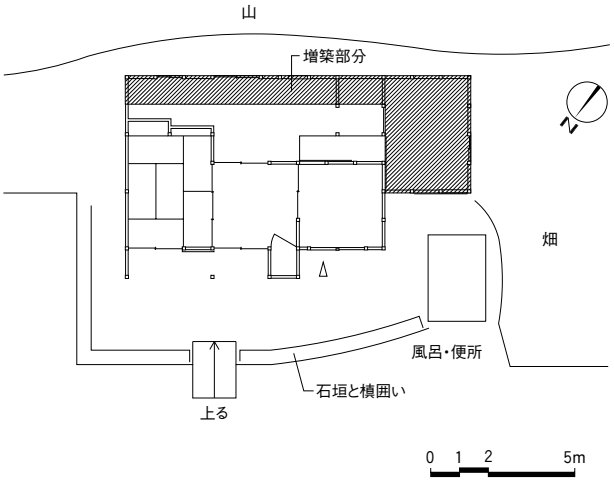

図38　配置平面図

6）No.57（平野部／平野型）

当家は椿町の椿川南岸の平野部に位置する。屋敷中央に主屋，西には離れとコヤがあり，東には大正10年（1921）頃建築の納屋と新しい鉄骨３階建の増築建物が建つ（図39）。

主屋（図40）の建築年は小屋裏の札書きにより大正５年（1916）（図41）。規模は間口６間，奥行3.75間，上屋梁2.75間。間取りは右勝手整形四間取。小屋組は丸太の叉首を１間もしくは0.75間で上屋梁に掛ける。ナカノマとドマ境で大黒柱から下屋桁を受ける持ち出し梁を出している。葺き材は山茅で，昭和40年頃にトタンを巻いた。小屋裏に土は置かず，板敷きで昔は茅を保管していたという。

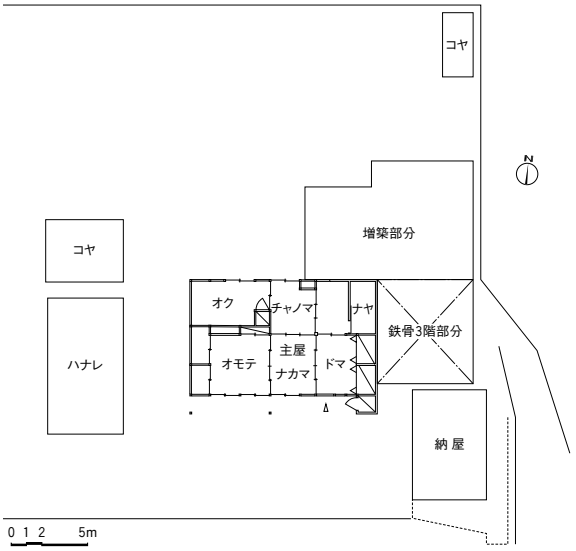

図39　配置平面図

図40　主屋外観

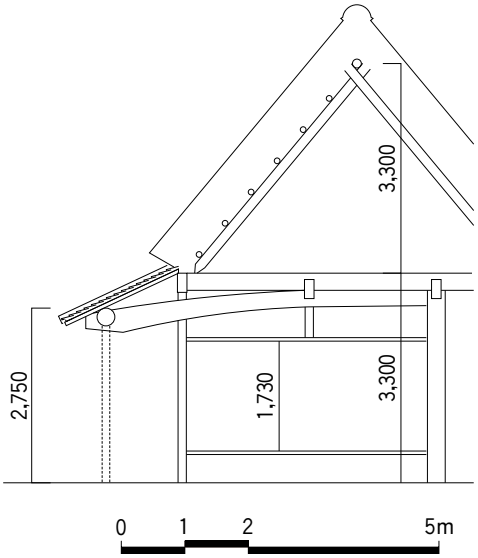

図41　断面図

5．まとめ

旧阿南市では新野や桑野，吉井などの山麓で集落が発達しており，茅葺き民家も比較的多く残っている。地形的には平野と山地の境で，山を背負うことから山間部の屋敷構えの民家に近いと予想されたが，敷地にゆとりがあるためか，屋敷構えは平野型が多い。県内他地域でもこのような集落はみられるが，山麓に住まう理由としては，耕作地としての水田と薪炭林としての里山，両方に近く仕事や生活をするのに便利なことの他に，山を背負うことで強い風雨や季節風から家を守ることができること，裏山を切り石垣を積み，耕作地より少し高い屋敷地とすることが容易で，洪水に対して強いといった理由が考えられよう。

平野部の民家は，屋敷のほぼ中央に南向きの主屋を配置しその廻りに付属屋を置く，ゆったりとした平野型の屋敷構えである。洪水の害から家屋を守るため石垣を積み屋敷地を高くしているが，これは吉野川中下流域の氾濫原に立地する民家と共通している。間取りについてはNo.34のような八間取，六間取といった規模の大きいものもあるが，四間取の民家が多い。また，勝手については先に述べたように右勝手の割合がかなり多く，これまでの調査結果を裏付ける傾向を示している。

山間部の民家をみてみると，傾斜地に建つ民家20軒のうち9軒が平野型の屋敷構えとなっており，北斜面であるにも関わらず南向きの平野型屋敷構えをもつ民家もみられた。これは，南向きの斜面に建つ民家が多かったことと斜面の傾斜が比較的ゆるやかであることなどが原因と考えられる。一方，比較的急峻な山間部の加茂谷西部地区では，主屋と納屋，離れなどの付属屋が一直線に並ぶような典型的な山の民家の屋敷構えもみられた。間取りについては四間取が多く平野の民家との違いはあまりみられない。

本調査では5軒の民家で小屋組みの調査ができた。明治期のものが3軒，大正期，幕末のものがそれぞれ1軒であった。丸太の叉首をほぼ1間毎に掛ける純粋な叉首構造である。祖谷などでみられる棟束や角材の叉首はみられなかった。規模が大きいNo.34の民家では叉首が開くのを止める貫を入れている。架構については上屋のみの構造の民家が多く「阿波の民家」で述べられている那賀川流域の下屋造りでない架構と一致する。また，多くの民家でオブタ桁を受けるためにオモテ，ナカノマ，ニワの各境で持ち出し梁を出しているものがみられた。これはオブタ柱をできるだけ少なくし，軒下空間を利用しやすくするための工夫で，佐那河内村や美郷村の民家にもみられる。

今回の調査では，これまで手薄となっていた県南の伝統的民家の調査を進めることができた。今後さらに調査範囲を広げながら，間取り形式や架構の特徴などを明らかにしていきたい。

謝辞

終わりになりますが，聞き取り調査や詳細調査にご協力をいただいたみなさまをはじめ，関係者のみなさまのご協力に深く感謝の意を表します。

文献

奈良国立文化研究所・徳島県教育委員会編（1976）：『阿波の民家』
文化財保護委員会 監修（1967）：『民家のみかた調べかた』
阿南市史編さん委員会編（1987-2013）：『阿南市史』

Thatched houses of “Anan City”

TAKATA Tetsuo*, KITA Junzo, TANINAKA Toshihiro, TAMURA Eiji, TUBAKIJI Hiroyuki, NAKAYAMA Shigeru, HAYASHI Shigeki, FUKUTA Yorito.
* 62-1 Kaminokuchi Oomatsucho, Tokushima, 770-8022 JAPAN

Proceedings of Awagakkai, No. 60（2015），pp. 101－112.